

# 音楽大学から個人レッスンを消えたら？ その1

## 香港児童合唱団を訪ねて

かずねしらべ  
和音調子

この6月には、ふたつの外国を訪れたこととなります。ひとつはイギリス領香港、それにアメリカです。そこで多くの音楽家とまたも仲良くなりました。音楽は世界の共通語とは、よく言ったものです。

香港では、香港楽壇の中心的人物ともいえるDr. Yipと新しくお友だちになりました。氏は、香港バプティスト・カレッジの芸術学部および音楽科の主任教授で、香港児童合唱団、パンアジア・シンフォニー・オーケストラの音楽ディレクターそして指揮者であり、またアメリカ仕込みの作曲家でもあるのです。

氏の御案内で香港児童合唱団の学舎を訪ね、授業参観させて頂いたり、バプティスト・カレッジのキャンパスを訪れさせて頂いたり、さらには香港滞在中の一夜、同大学の卒業記念パーティにお招き頂いたり、それは楽しい日々を過ごさせて頂きました。

先の“Our Music”にも書いたことですが、私たちは本当にお隣の国のことを、あまりに知らな過ぎるということをもっと深く感じて帰って参りました。とともに、自国内のことで、同じ音楽教育の中の他の分野のこととなるとあまり知らず、ごく限られた知識・情報の中で音楽生活を送っていることを強く感じました。ピアノ教師は、とかくピアノ、あるいはソルフェージュとピアノだけが音楽の対象であるような錯覚に陥りがちだ思うのです。私はもっと外に広く知識（技術も）を求めべきだと思います。

ところで、香港児童合唱団は、子どものための音楽学校といった方がよいかも知れません。香港は小さな島国で、ニューヨークのマンハッタンと同じ様に土地がなく、上に伸びるより仕方がない「高層建築の林」といった様な国です。そんなビルディングの中の一角に香港児童合唱団があって、変声期前の子ども約2000人が、音楽の総合教育を受けているのです。台湾の音楽小学校とは異なり、一般の幼稚園・小学校に通い、放課後週2～3回の音楽指導を受けるために、このビルに集まって来ます。

6歳のクラスの「合唱の時間」(合唱団なので合唱が主たる教育になるのは当然)を見学させて頂きましたが、30人位入る階段教室で、12～3人の子ども達が、電子黒板を用いて読譜遊びのような授業を受けていました。いわゆるソルフェージュの様なものでしたが、子ども達の顔が実に生き生きして、ここに集まって来るのがうれしくて仕方がない、といった明るい顔ばかりなのが、

特に印象的でした。電子黒板は、音名当て遊びや模倣唱、簡単な創作などができる「大譜表のマシン」といったところ。また、あるクラスでは、リトミックの授業を思わせる跳んだりねたり、またふたりの子どもがつくるトンネルの中を歌いながらくぐったり、という「舞踊の時間」も見学しました。

事務局では、香港児童合唱団が新しく開発したという、コンピュータによる教育システムの説明を受けました。大病院で見られるテレビ画面のような、あれです。この合唱団の一期生だとおっしゃる若い女性が事務局長さんで、この合唱団の歴史は17年位だということでした。

どの部屋も全部クラス授業。ピアノなどの個人レッスンに頼らなくてはならないものの教育についてお尋ねしたところ、この合唱団でも、初めはピアノの授業があったということですが、今は廃止され、個々の家庭に任されているとのことでした。

ここで、日本の音楽大学のことを思い出しました。私は、大学の中に、プライベート・レッスンをおくことが絶対的なことであるか、疑問を持っている者なのです。

大学から委任された優れた教授者のところに個人レッスンを受けに行く。期末試験等は、勿論大学内で公開演奏の形で行われなければなりません。

ある音大では、学内の担当教官以外の個人レッスンを受けることは、禁じられているともいいます。ですから「大学には内証で〇〇先生のレッスンを受けているのよ」などという会話を、しばしば耳にすることになるのです。それでいて、△△大学に入るには、△△大学の教授に師事しなければならない、といったような、馬鹿げた神話？が成立するのです。

個人レッスンの指導教官を外に広く求めることにより、演奏によって自身の力を示すわけでもなく、教えた生徒達の演奏によってその指導力を世に問うわけでもない、いわゆる名前だけの「教授」の自然淘汰がなされると思うのです。そして、教授者も学生も、井の中の蛙となることなく、よい意味での自由競争からくる、質の向上がなされるのではないかと、想像するのです。

児童合唱団の校舎入口ロビーには、ヨーロッパをはじめ、日本を除く世界各国への演奏旅行の写真が、数多く掲示されていました。ここから、きっと優れた音楽家が育っていくに違いないと、その将来に希望を託して、香港児童合唱団を辞したのです。

表紙 左・初来日のステッカー氏とホロヴィッツ氏、デュオ・リサイタルのあとで 右上・滋賀県近江八幡市でのヤングピアニスト・コンペティション第1次予選 右下・ピアノ・フェスティバルのトップバッター、広瀬春子先生と子ども達





ねんだったです。

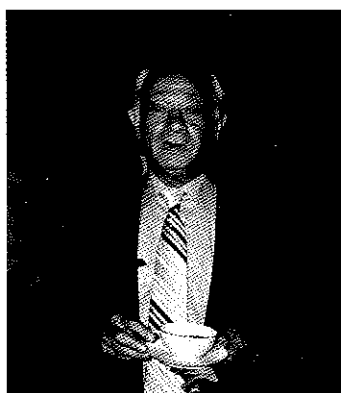
すばらしいミュージカルを見て感動しました。英語がぜんぜん分からな

個人の豪邸のパーティに度々招かれたが その中のひとコマ。最年少の野口満帆ちゃんの演奏に聴き入

ったけれど、動作で何をやっているのか少し分かりました。それから、グランド・キャニオンやディズニー・ランドへ行ったり楽しいことばかりでした。

ひとつざんねんだったことは、英語がしゃべれなかったことと、分からなかったことです。また、アメリカへ行けたら、英語をたくさん勉強して、外国の人たちとお話したいです。

福田先生、アメリカへ連れて行って下さって、ありがとうございます。



審査員も務められたピアノリスト、アレック・シューマン氏。亡きシーナ・バックハウアー女史の夫君

## 最大の収穫は“！！！！……”

上杉春雄

僕はアメリカへ行って、面白かったこと、勉強になったことなどいろいろあるが、驚いたことも少なくない。そのうち最も印象的なのは、日本とアメリカの文化の差である。まず、パーティーに驚かされた。ソルトレイクで、雰囲気的にどこにでもありそうな家が数十人の人たちをよんで、庭でパーティーを開いた。なんと優雅なことか、なんとリッチなのだろう。日本でこのような光景がどこで見られるだろう。

さらに驚いたことには、銀行やショッピングセンターにスタインウェイが置いてあったのである。ソルトレイクにどのくらいショッピングセンターがあるかはわからないが、ホテルの前に“ZCMI”と“Cross road”のふたつがあり、両方ともピアノが入っていた。“Cross road”にはD-Type というのか、一番大きなのがあった。

また、銀行という日本では「かたい」という感じがあるが、アメリカのそれは全く違い、窓口の前にスタインウェイ自筆のサイン入りピアノがあっ

たり、隣の部屋でパーティーをやったりして、僕の「銀行」に対するイメージは全完に狂ってしまった。もっと驚いたのは、ソルトレイクという地方都市の一楽器店が、スタインウェイをコンクールに寄付したことである。

もうひとつ、文化とは関係ないが、アメリカへ行って驚き、かつなるほどと思ったことは日本車の進出である。アメリカでは3割以上が日本車ではな

いかと思うほど多かった。全く、アメリカがカッコするのもムリはないと思った。

以上がとくに印象的な事柄であるが、僕はこれらのように、日本で実感なく、ただ見たり聞いたりしていたことをまのあたりにして「なるほど」と思ったり、想像もしていなかったことにぶつかり「う〜ん」と感心したりしたことが、今回の旅の最大の収穫ではなかったかと、ひそかに思っている。

## アメリカの旅について

若林真由美

今回の旅はいろいろな面でほんとにすばしかなかったです。まず向こうで演奏できたというだけでも、とてもよかったです。暑くてぜいぜいあえいでいた、ユタでの演奏でした。スタインウェイの音をひびかせるのがたいへんで、もう必死でした。今思い出すと、あの単一で色彩に欠ける私の音や、ずれてしまうペダリングのこと、わけてもテクニックのなさが頭に浮かび、自分の未熟さに腹が立ってきます。ジーナ・

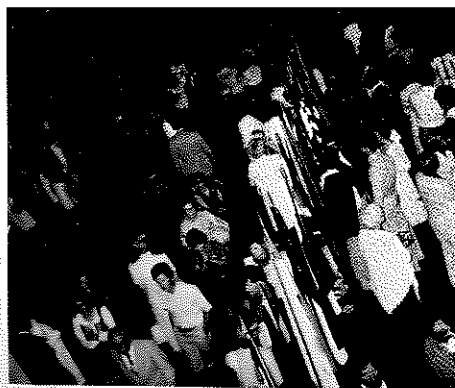


グランド・キャニオンでくつろぐ

バックハウアー国際コンクールのファイナリストの人たちのすばしかなかったこと！ すごく「いいなあ」と思うとともに、「せめてあの人たちに少しでも近づこう」とホテルの部屋で考えたことを、あらためて思い出しました。

それから「行ってよかった」と心から思うわけは、あのすごいスケールの大きなアメリカにふれたことです。自然で

も、ピアノの演奏でも、人々の考え方や生活でも、ほんとにとにかく大きいです。今まで小さな島国日本から1歩も出たことのなかった私にとって、想像を絶する大きさでした。セスナ機に乗って上からグランド・キャニオンを見たとき、何か息がつまりそうでした。小さい日本には日本らしい、奥床しさや優雅なものを感じますが、アメリカの雄大さ、壮大さはとてもすばらしいものです。その広い国の歴史が、音楽はもとより、生活や考え方にもにじみ



審査発表を待つロビーの人たち

でているのではないのでしょうか。そんな中に、たった半月ほどですが、くられたことは、何か私に影響をあたえてくれたようです。とにかくこれから先、未来のことはわかりませんが、何かよい影響がどこかでできると思いますし、

またそのことを願っています。

最後に、いろいろ教えて下さり、旅を一生に一度のこんなにすばらしいものにして下さった福田先生、何とか助けてくれた他のかたたち、ほんとにありがとうございました。

## 立派なホールで演奏できて感激!

マルケータ・ポスピシロバ



カーテン・コールに応えるピティナ・ヤングピアニストたち

私は今度のアメリカ行きを心待ちにしていたのですが、アメリカでの演奏会で日本の入賞者の皆さんと一緒にピアノを弾く機会に恵まれ、その上アメリカの有名な都市にも行くことができました。

ジーナ・バックウアー国際コンクールの決勝会と受賞演奏会も聴いてきましたが、何人もの、若いながらすばらしいピアニストの演奏に接することができたのは、貴重な体験でした。演奏会ではモーツァルトとシューマンを弾きましたが、あんなに立派なホールで演奏できて、とても感激しました。また、スタインウェイ・ショップの支配人の方がお店で練習させて下さったのもラッキーでした。感謝しています。

演奏会は大成功に終り、みんな十分満足していました。演奏会を終えてから、グランド・キャニオンやサンディエゴ・シー・ワールド、ディズニー・

ランドなどへも行きましたが、私はサンフランシスコとソルトレイク・シティがとくに気に入りました。

今度のアメリカ旅行は、私の将来にとっても、たいへん実りあるものとなりました。私にこの機会を作って下さった福田先生、PTNAの先生方、ありがとうございました。この経験は一生の思い出となることと思います。

(秋澤直樹訳)

## 楽しかったアメリカ、ピアノ演奏旅行

三木康子

今回の旅は、わたしにとっては、初めての外国旅行です。アメリカは、とても大きかったです。日本は100分の1もないくらいでした。そんな、とても広いアメリカに行けるようになった時は、心ぞうがドキドキするくらい、うれしかったです。さいしょ、13日間は、長い旅だと思っていましたが、アメリカにいと、13日間があつという間にすぎてしまいました。

一番心に残ったことは、ソルトレイクの美しい町で、何度もピアノの演奏をしたことや、ジーナ・バックウアー国際コンクールを見学したことです。

そのソルトレイクの町は、遠くに山が見え、景色のとても美しい所でした。澄んだ空気、おいしい水、親切な人たち、こんなにいい所は、世界でもソルトレイクくらいしかないみたいに思いました。そこで、わたしは、スタインウェイ・ホールや、デモンストレーションや、大きなステキなお家でのパーティーなど、たくさんの方の前でひけて、とてもうれしかったです。外人の方が「ブラボー!」「ナイス!」「ワンダフル!」「ビューティフル!」などと言って下さいました。演奏がすんでホテルにもどった時、カリタさんという

グランプリは誰の手に? 夜11時から始まった表彰式



右端が当コンクール主催者DR・ポール・ボレイ氏。その隣りは1位のミシェル・ガーツ氏

方からバラの花がとどいていました。わたしは「スター」になったみたいで、毎日がゆめのような日でした。

ソルトレイクの最後の日は、ジーナ・バックウアー国際コンクールの決勝の日でした。みんなと一緒に、シンフォニー・ホールへ聞きに行きました。4階まで満員の人でした。ガーツさんはじめ、すぐれた人ばかりでした。

ガーツさんは、美しい大きな音で、魔法の手をもった人のように思いました。ひかれたあとは、「ブラボー!」の声があちこちから聞こえ、わたしもみんなと一緒に立ってはいく手しました。

スミスさんはリストのコンチェルトをひかれました。とても楽しい曲でした。トライアングルの音とピアノの音がまざって、快い感じでした。スミスさんも一生けん命ひかれてとてもよかったです。わたしは、聞いた曲の中では、リストのコンチェルトが一番好きでした。

そして、わたしは、大きくなってもう一度アメリカのソルトレイクに行つて、あの大きなシンフォニー・ホールで、満員のお客様の前で、リストのコンチェルトをひいてみたいなあ、と思っていました。



左より審査員のジョアンナ・ハリス女史 リーズ国際コンクール主催者でもあるハニー・ウォーターマン女史とその夫君